『ある日の佛蹟行脚の旅』

インド留学僧
安井隆同

十二月二十一日、晴

小鳥の囀りとともに目を覚す。朝五時三十分頃、ここはナーランダの中国寺院である。印度には現在、中国人の僧はほとんど住んでいないのでタイの留学僧が留守番をしていた。暫く庭の手押しポンプで洗面、そこにあった空缶に水を入れ村はずれの道端で大便を……事後処理は印度式、右手で空缶の水を後ろから尻の谷間に流しながら左素手で拭くのだ、一見原始的で不潔に考えられるこの方法は慣れるととても気持ち良く爽やかに感じる。あたりはまだ薄暗く印度とはいえ冬なので肌寒い。二、三人の人が近くで同じように用便を足している。

寺に帰り本堂の庭の草の上でタイの留守番僧と二人で朝食に紅茶（チャイ）とビスケットを戴く。朝食の後散歩しながら近くのヒンズー教の寺院にお参りしたが僧らしき人の姿は見えなかった。ナーランダ大学跡に行き草の上に寝転んでくる。帰り道路では子供達が縄を丸めてボールを作り、素足でクリケットに興じていた。犬が見知らぬ私に吠えかかり後を追ってくる、あまり気持ちいいものではない。

十一時半頃、中国寺に帰ってくると、印度人の老婆が昼食だと呼びに来る。昼食には、ご飯にジャガイモとカリフラワーのカレー、それに

カボチャの花と蔓の塩茹でを戴く。カボチャの花や蔓を食べたのは、初めてのことで何んとも言えぬ……味だ……。タイの留守番僧の食欲旺盛なのには驚く。見る見るうちに私の三倍以上は軽く平らげた。インド、ビルマ、タイ、スリランカなどの小乗佛教の僧は、十二時を過ぎると食事を取らず、一日二食である。それで昼食には沢山、夕食の分も食べるのかも知れない。

もう一晩ここに泊まろうか……、パトナに向って歩ゆみ出そうかと迷ひつつ……、十二時半ごろにナーランダを後にする。ナーランダからパトナの方に向っては、見渡す限りの平野が

放浪のサドゥ（聖者）

つづく……。ただ地平線を見つめてゆっくり歩む。歩いても歩いても同じような風景……赤茶けた平野……。

親切に車を止めて、『何処まで行くのだ。乗って行け』と声をかけて下さる人、『私の家はこの先だから休んでいって下さい』と連れて行って下さる人、行きなり『何処から来た、何しに来た、名前は……』と尋問する人、不思議そうに見つめ、ニッコリ笑顔で通り過ぎる学校帰りの小学生、口の中で草を噛みながらじっと私を見つめる手。風に揺れ手を振っているかのように見える野の草……。

村人に、牛に迎へ送られ、旅を行く
ほほ笑めば　ほほ笑み返す
村人も　牛も　野の草も……。

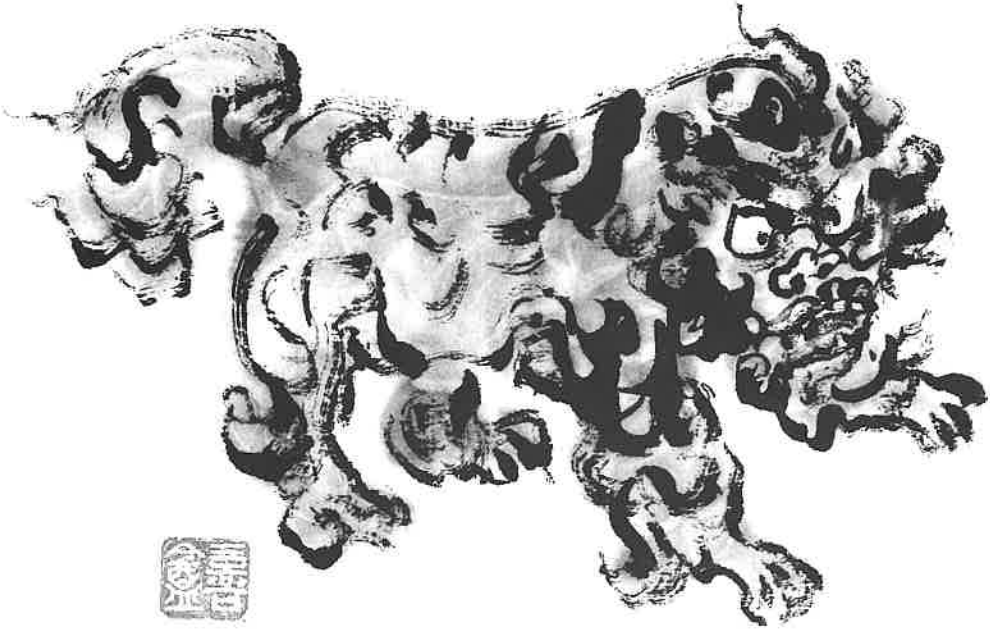
どれほど歩いただろうか、道端にポンプを備え付けて畑に給水している。私は早速、下着を脱いで洗濯、水浴させて頂く。すっきり爽やかな気持ちで、裸の上に墨染めの衣を着、洗濯した下着は、日当りのいい草の上に乾し、木影で網代笠を顔の上に被ぶせ昼寝する。

空はかぎりなく青く高い……。
道はかぎりなくつづく……。
夢はかぎりなく広がる……。

目を覚ますと、褌は乾いていたので確かり紐を締め、シャツは半乾き、そのシャツを頭に被ぶった網代笠の上に載せて乾かしながら歩ゆみ出す。それにしても、この辺はとてもハエが多い。牛や人の糞に群がっていたハエが、そのまま直接私の顔や手に飛んできて群がる。払っても払っても、追い払いようが無い。気持ちの良いものではない。一所懸命ハエを追い払いながら歩いていたが、諦めて歩み出すと、ハエが私に『そんなに嫌がるな、牛や人の糞もあなたも、私らから見れば同じさ。』と言っているように聞えてきた。ナーランダもハエの多い所だった。

先ほど洗濯したシャツと褌に何か蚤か虱の糞のようなものが付いていた……。あれは何んだろう……、どうしてだろう……。

ビハールシャリフという町に着いた。印度の多くの町がそうであるように、この町も人、牛、人力車、自転車、自動車、牛車、馬車、バス、トラックでごった返し、騒々しいことこの上ない。バザールでミカン六ケ、モンキーバナナ八本、計八ルピー（百六〇円）を買い、食べながら歩く。これが夕食だ。もう太陽が沈む、速く今夜の宿を求めなければ……そう思いながら歩いていると、一軒の医院の前で、医者らしき人が私を手招きする。よし、ここで一夜の宿を乞おうと思い行ってみる。ビハールシャリフを過ぎた、ソーサライという町のマニスクリニックという医院だった。外科医院らしく怪我をした数人の人が横たわっていた。私がこの医院の表で、日記を書いていると、二十数人くらいの近



くの印度人が、ものめずらしそうに取り囲み、日記を覗き込んでいる。ひとりの人が、不思議そうに、これは何語かと聞く、日本語だと答えると、声を出して読んでくれと言う。私は、下手な字の日記を少し読んだ、みんな初めて聞く日本語を興味深そうに聞いていたが……そのうちに誰れからともなく笑い出す。どうせみんな日本語を聞いても分からないので、私の下手な走り書きの日記でも少しも恥かしくない。通じないということは良い事もある。

ここの医院のラビンドラ・プラサドという医者は、ここに泊まるよりも、近くにヒンドウ教徒のダラムサライという巡礼宿があるからと案内して下さる。もう日もとっぷり暮れている。真っ暗で電気も無く、あまり人の気配も感じない、何んとも不気味な所である。

大声で何度呼んだだろう、老いた不愛想な番人が出て来た。一夜の宿を乞うと、黙ったまま暗がりの中の一つの部屋に案内して下さる。電気はと聞くと、そんなものは無いと言う。案内して下さった医者は、ローソクを持って来るように頼んで下さった。暫くすると番人が一本のローソクを持って来た。部屋には、まったくものといふ物は何ひとつ無く、埃りと部屋だけ、三十畳くらいの広さだろうか。薄気味の悪いことこの上ない。案内して下さった医者は、私にここで大丈夫ですかと聞いて下さる。私は内心、心細そかったが笑顔で大丈夫ですと感謝の礼を述べた。ひとりになり、コンクリートの床に寝袋を広げ中に入り寝転ぶが、蚊の集中攻撃で眠れない。顔に風呂敷を被り、その上から網代笠で覆い眠る。耳もとでは、ウーン、ウーンと蚊の羽撃く子守歌……。よろこびと感謝で眠り、夢を観る。

合掌